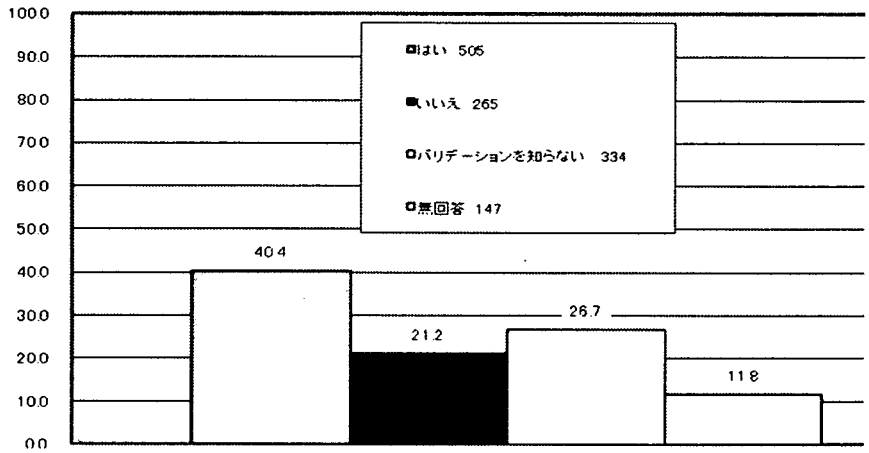
滅菌のバリデーションを実施していますか（1251）

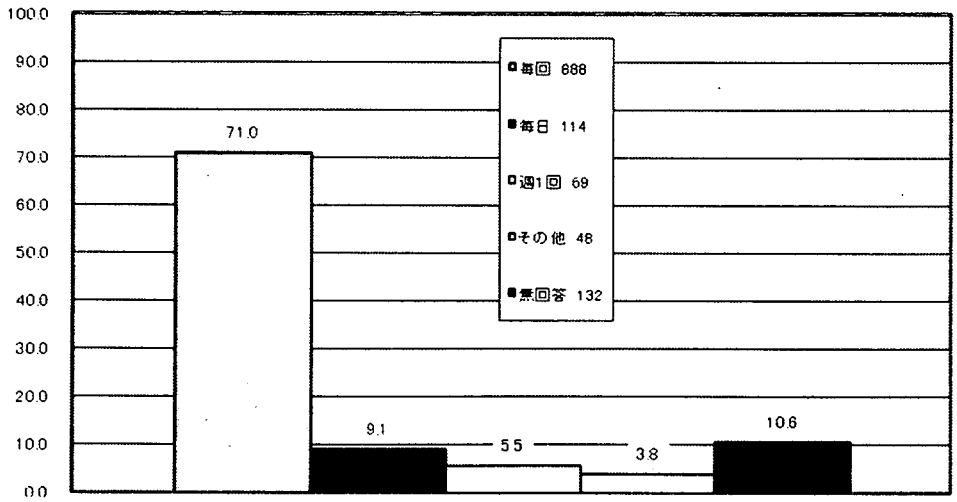


Q6. 滅菌法別に見た化学的インジケータの使用状況（高圧蒸気滅菌）

化学的インジケータの使用頻度については「滅菌保証のガイドライン 2005（日本医療機器学会編）」において、すべての工程でかつすべての包装の内外に使用すべきとなっている。

アンケート結果では、高圧蒸気滅菌においてすべての滅菌にて実施されている割合は 1,251 病院中 888 病院（71.0%）であり、毎日実施は 114 病院（9.1%）、週一回程度は 69 病院（5.5%）となっている。

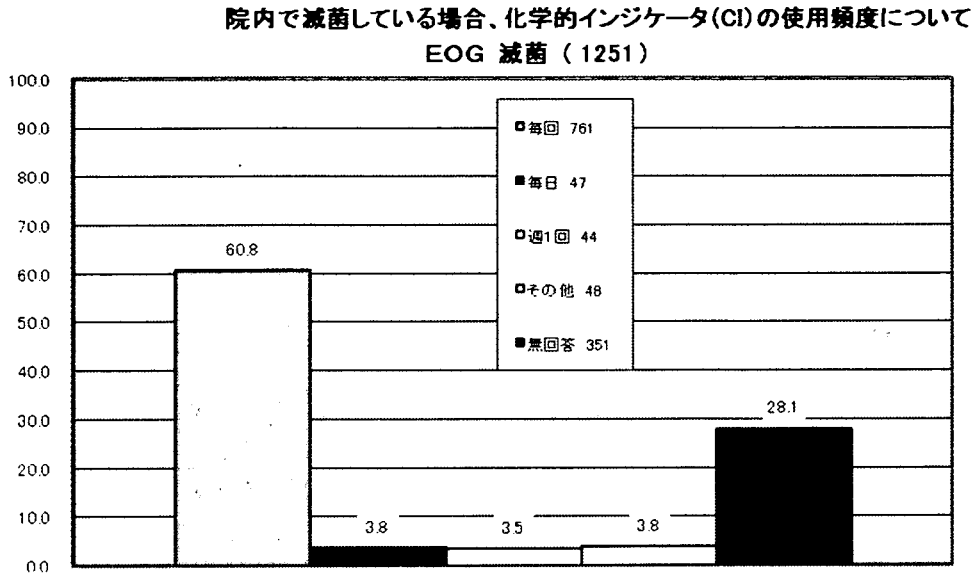
院内で滅菌している場合、化学的インジケータ(CI)の使用頻度について
高圧蒸気滅菌（1251）



Q7. 滅菌法別に見た化学的インジケータの使用状況（EOG 滅菌）

EOG 滅菌においても同様に、すべての工程で実施することが求められている。

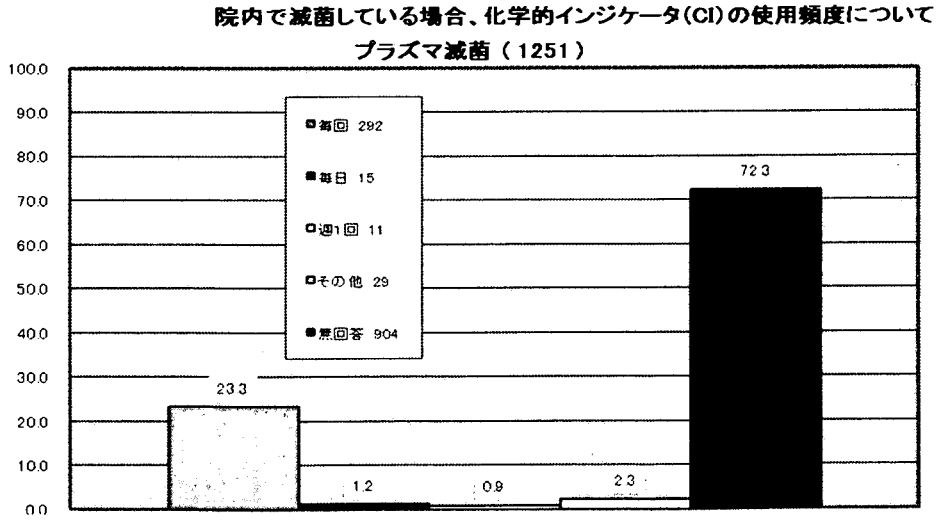
アンケート結果は、すべての滅菌ごとに実施している割合は、1,251 病院中 761 病院（60.8%）である。週一回の実施は 44 病院（3.5%）となっている。



Q8. 滅菌法別に見た化学的インジケータの使用状況（過酸化水素低温ガスプラズマ滅菌）

「滅菌保証のガイドライン 2005（日本医療機器学会編）」において、過酸化水素低温ガスプラズマ滅菌における化学的インジケータは、やはりすべての工程でかつすべての包装の内外に使用すべきとなっている。

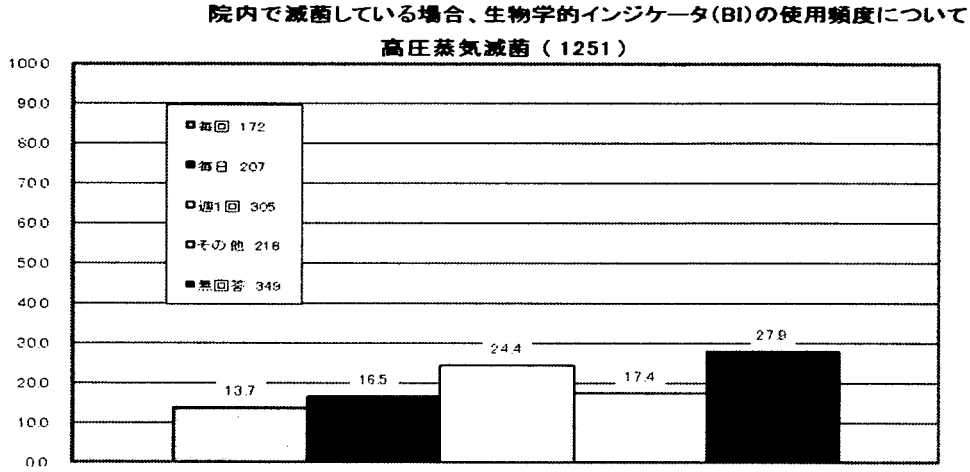
今回の調査では、すべての滅菌工程で実施している割合は 1,251 病院中 292 病院（23.3%）であり、無解答が 904 病院（72.3%）に達しており、過酸化水素低温ガスプラズマ滅菌器そのものが設置されていない病院が多い状況がうかがえる。



Q9. 滅菌法別に見た生物学的インジケータの使用状況（高圧蒸気滅菌）

生物学的インジケータの使用頻度については「滅菌保証のガイドライン 2005（日本医療機器学会編）」において、滅菌法別に異なっている。高圧蒸気滅菌においては、滅菌法そのものの安定性が高いこともあり、少なくとも一週間に一回以上の実施が推奨されている。

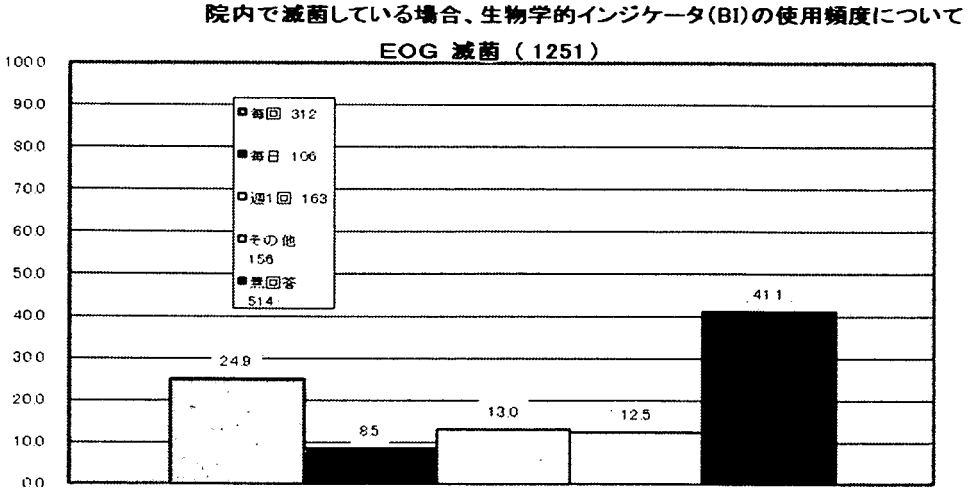
アンケート結果では、1,251 病院において週一回以上の実施率のある病院は毎回 172 病院、毎日 207 病院、週一回 305 病院あわせて 684 病院（54.7%）となっている。



Q10. 滅菌法別に見た生物学的インジケータの使用状況（EOG 滅菌）

EOG 滅菌では、高圧蒸気滅菌法に比較して、ガスの濃度や温度、湿度、時間などの滅菌のためのパラメータが多いため、すべての滅菌工程にて生物学的インジケーの使用が推奨されている。

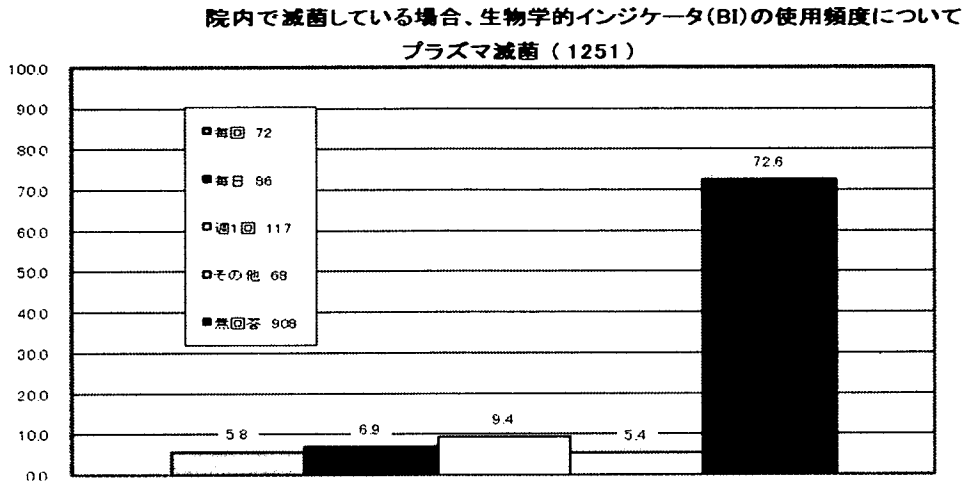
アンケート結果では、1,251 病院中で毎回滅菌ごとに実施している病院は 312 病院（24.9%）に過ぎない。一日一回の使用は 106 病院（8.5%）、週に一回の実施は 163 病院（13.0%）である。



Q11. 滅菌法別に見た生物学的インジケータの使用状況（過酸化水素低温ガスプラズマ滅菌）

滅菌保証のガイドラインでは、過酸化水素低温ガスプラズマ滅菌における生物学的インジケータの使用に関しては、一日一回の使用が推奨されている。

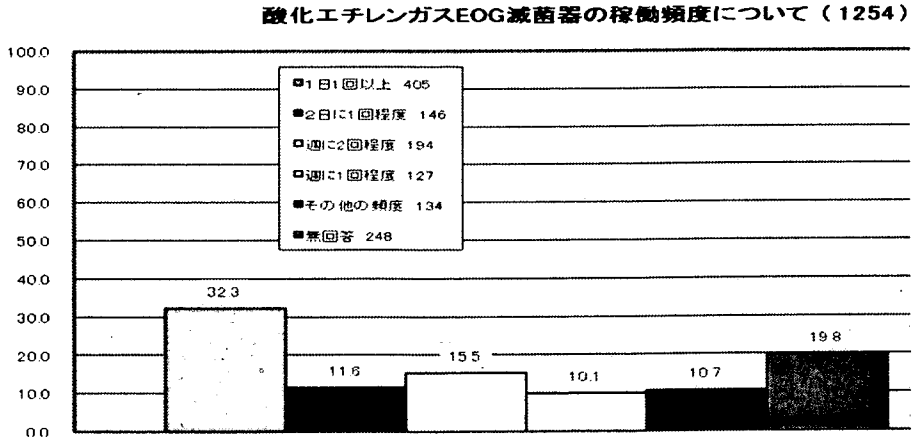
アンケート結果では、毎回および一日一回以上実施している病院は 1,251 病院中 158（12.7%）であり、週一回の実施は 117 病院（9.4%）である。



Q12. 酸化エチレンガス滅菌の稼働頻度について

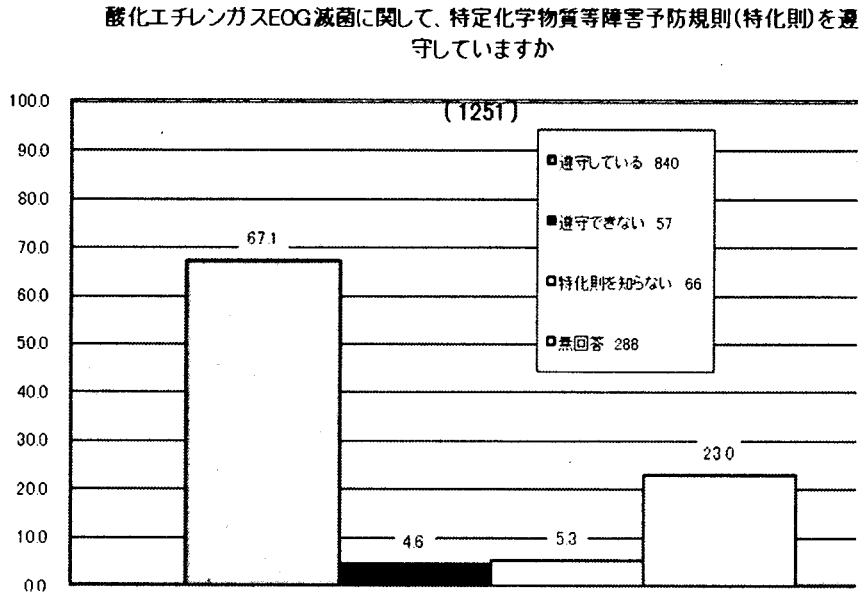
酸化エチレンガスは生体毒性が強く、滅菌した器材への残留ガスについても危惧されている。病院内の器材の大部分（水以外）は、酸化エチレンガス滅菌が可能であるが、その毒性などにより耐熱性の器材はなるべく高圧蒸気滅菌を使用した滅菌法でおこなうことが望まれている。そのため酸化エチレンガス滅菌の使用頻度が高い病院では、他の滅菌法が可能な器材まで酸化エチレンガス滅菌をおこなっている可能性がある。

今回のアンケートでは、一日一回以上稼働している病院は 405 病院（32.3%）、二日に一回程度の病院は 146 病院（11.6%）であり、酸化エチレンガス滅菌の稼働頻度はそれほど高いものではないことが明らかである。（3 病院が複数回答をしていた）



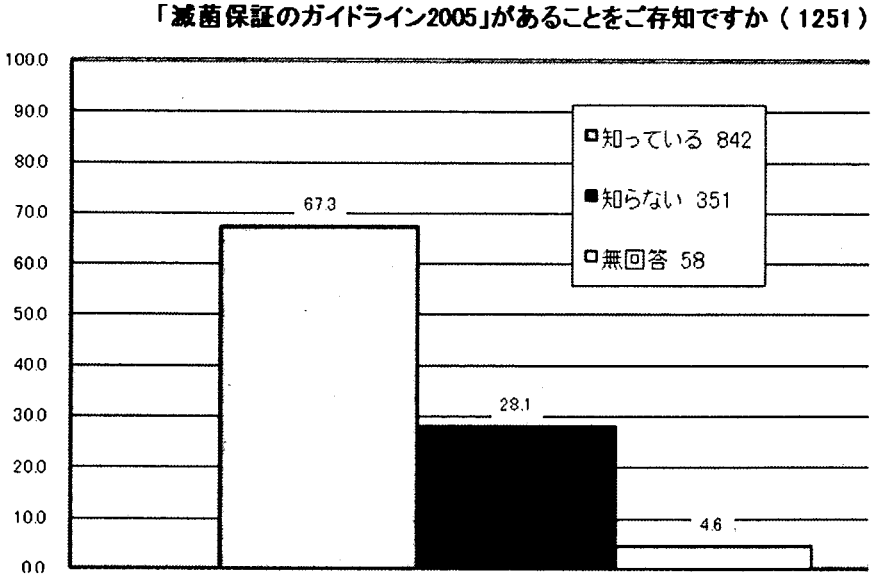
Q13. 酸化エチレンガス滅菌の特定化学物質等障害予防規則（特化則）の周知

酸化エチレンガス滅菌の実施において特定化学物質等障害予防規則（特化則）が周知されているか否かの結果では、1,251 病院中 840 病院（67.1%）で遵守されていることがわかった。



Q14. 滅菌保証のガイドラインについて

日本医療機器学会で作成されている「滅菌保証のガイドライン 2005」の存在についてのアンケートでは、1,251 病院中 842 病院で知っているという結果である。

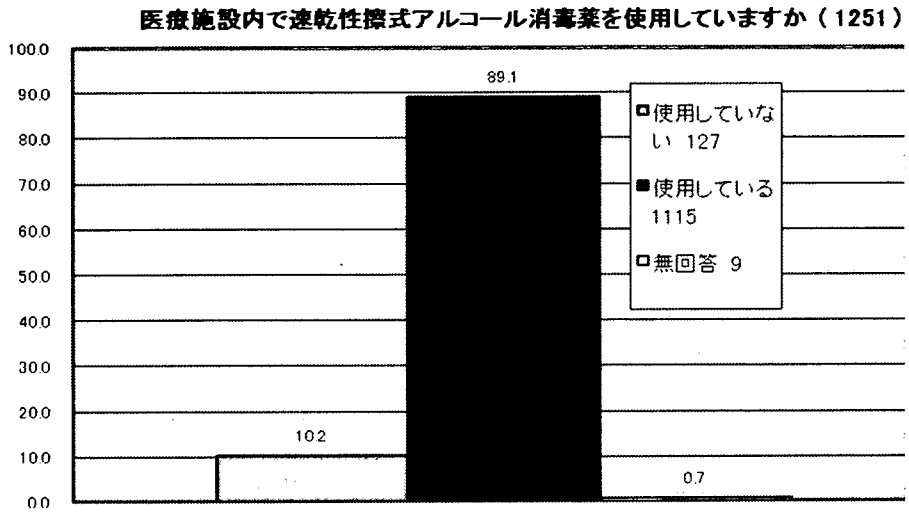


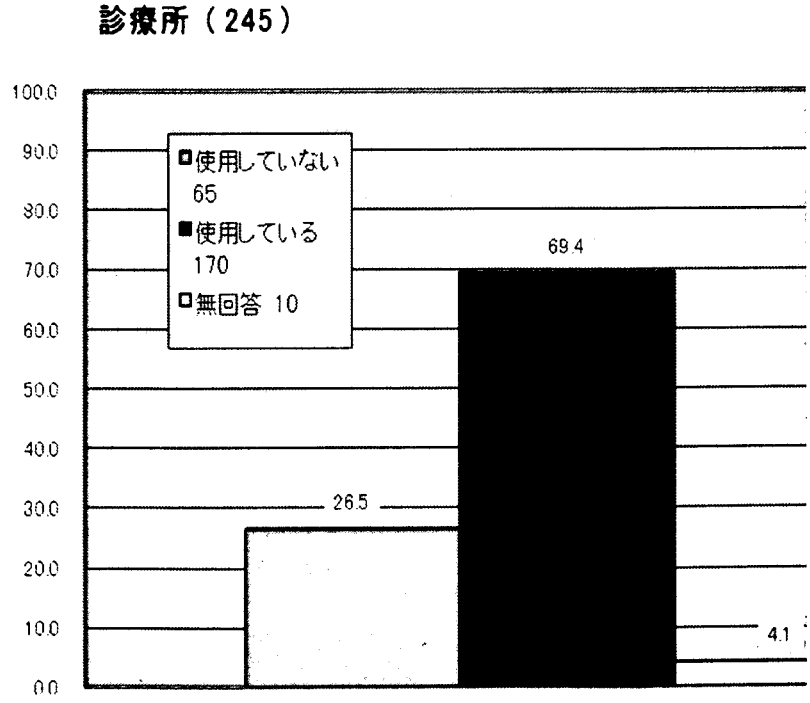
Q15. 速乾性擦式アルコール消毒薬の使用状況について

感染防止のためには手指衛生は重要な手技である。医療施設内で速乾性擦式アルコール消毒薬がどの程度使用されているかについて調査した。

その結果、1,251 病院において 1,115 病院（89.1%）で使用されていることが明らかとなった。一方、127 病院（10.2%）では使用されていない実態も明らかとなっている。

診療所では、245 施設中 65 施設（26.5%）にて速乾性擦式アルコール消毒薬が使用されていない。使用している施設は 170 施設（69.4%）である。





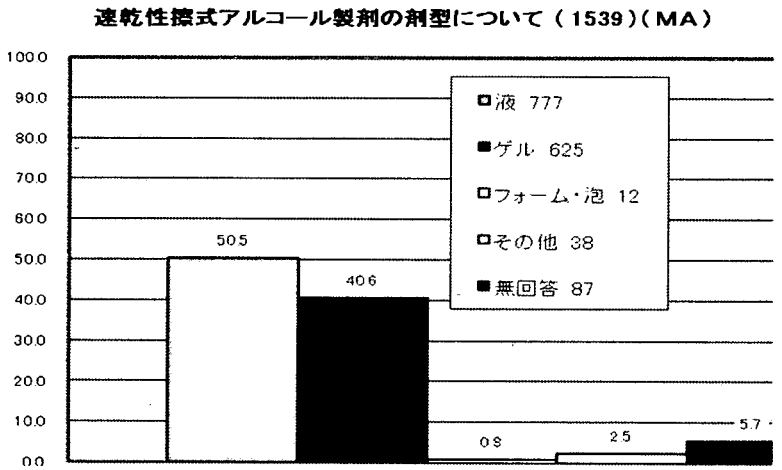
Q16. 速乾性擦式アルコール消毒薬の剤型について

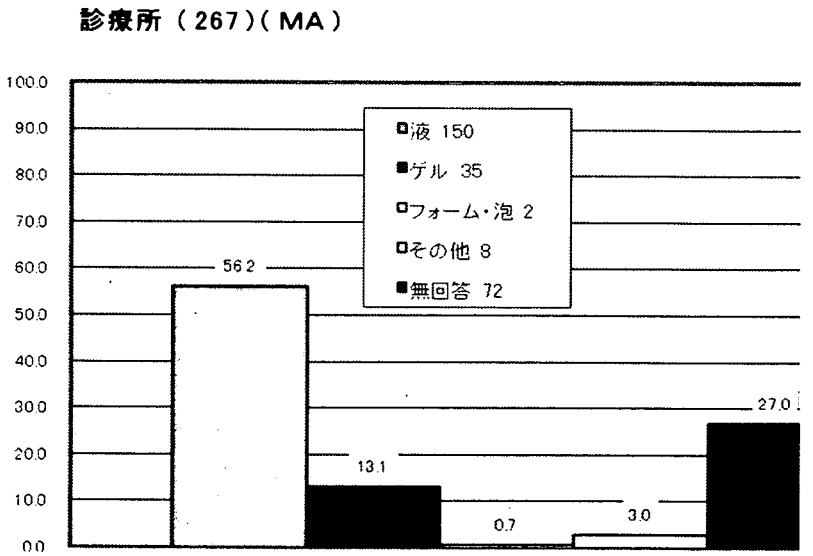
複数回答を可として調査した。

速乾性擦式アルコール消毒薬には、ローションタイプ、ゲルタイプ、泡（フォーム）タイプなどが販売されている。

どのようなタイプが好まれているかについて調査した。その結果、1,539 件の回答中において 777 病院（50.5%）でローション（液体）タイプが使用されていた。続いてゲルタイプが 625 病院（40.6%）であった。泡（フォーム）タイプはほとんど使用されていなかった。診療所ではローションタイプが 267 施設中 150 施設（56.2%）でもっとも多い。

複数回答がおこなわれているため、病院単位でみると 1,251 病院においてローションタイプの使用は 62.1%、ゲルタイプの使用は 50.0%の頻度となる。診療所ではローションタイプが 61.2%、ゲルタイプは 14.3%となる。



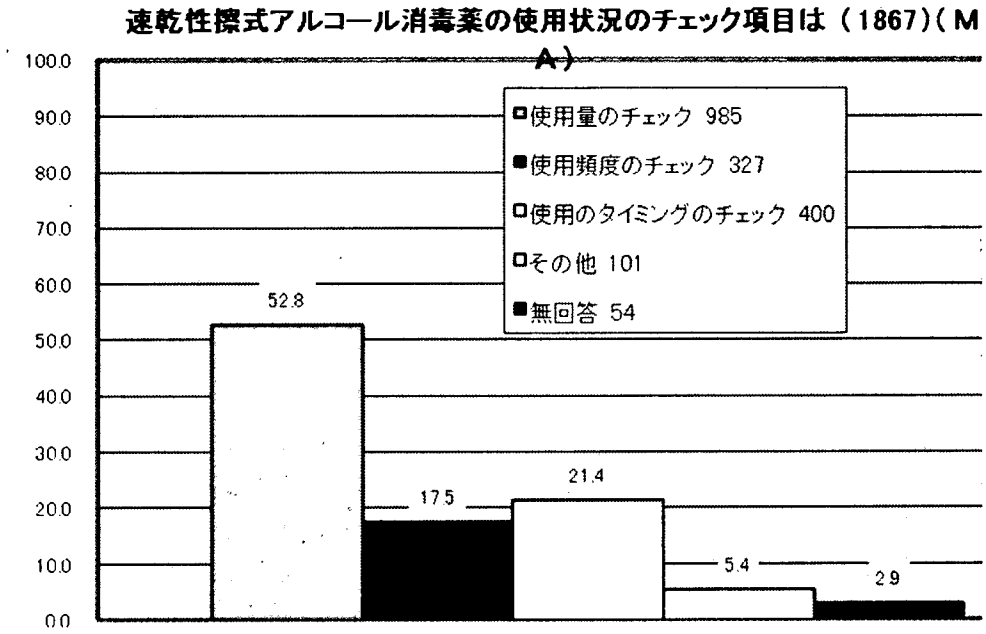


Q17. 速乾性擦式アルコール消毒薬の使用状況の把握方法

複数回答を可として調査した。

速乾性擦式アルコール消毒薬の使用状況の把握方法については、使用量のチェックが一般的であり 1,867 件の回答中で 985 病院（52.8%）が実施していた。その他使用頻度（回数）のチェックが 327 病院（17.5%）、使用のタイミングのチェックが 400 病院(21.4%)であった。

1,251 病院における状況としてみると、使用量のチェックは 78.7%、使用頻度のチェックは 26.1%の病院でおこなわれていた。

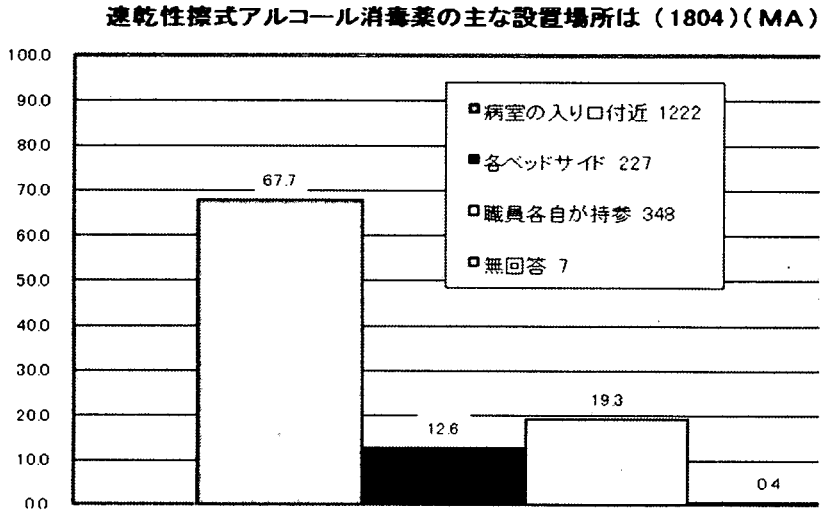


Q18. 速乾性擦式アルコール消毒薬の設置場所

複数回答を可として調査した。

病室の入り口付近への設置は 1,804 件の回答中 1,222 病院（67.7%）である。ベッドサイドへの設置は 227 病院（12.6%）である。スタッフが持参する方法も試みられており、348 病院（19.3%）に達している。

複数回答のため、病院単位でみると病室入口への設置は 97.7%、ベッドサイドへの設置は 18.1%、職員が持参している病院は 27.8%である。



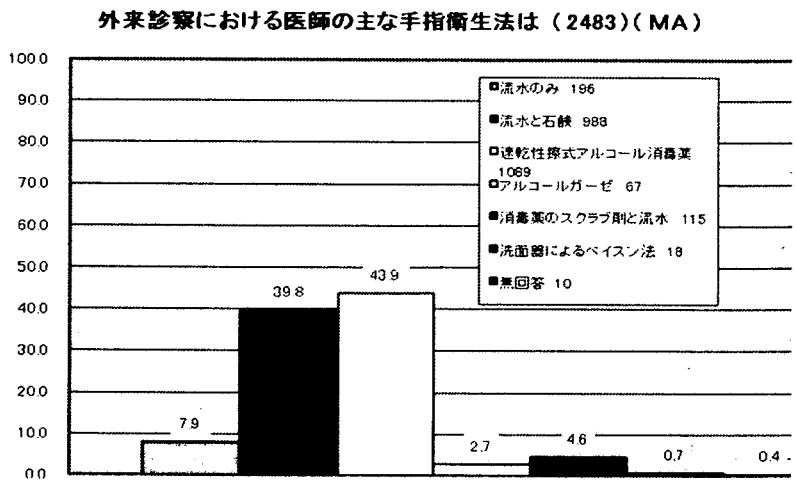
Q19. 外来診療中の医師の手指衛生法について

複数回答を可として調査した。

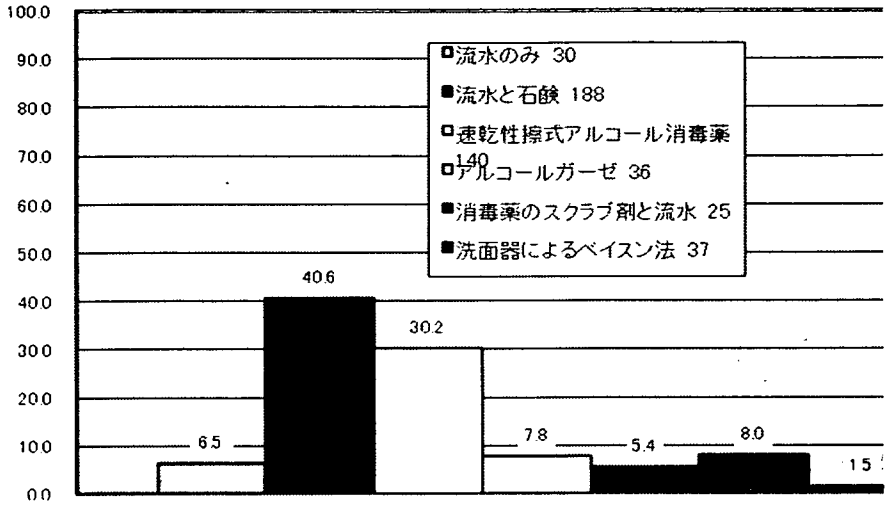
診察途中の手洗いにおいては、流水と石鹸が 2,483 件の回答中で 988 病院（39.8%）、速乾性擦式消毒用アルコール製剤を用いた手指衛生が 1,069 病院（43.9%）で、この両者が主流となっている。一方、かつての主流であったベイスン法は、18 病院（0.7%）にとどまっている。

病院単位でみると 1,251 病院中において流水と石鹸の使用は 79.0%、速乾性擦式消毒用アルコール製剤を用いた手指衛生は 85.5%となる。

診療所においては、流水と石鹸による方法が 463 件の回答中で 188 件（40.6%）と最も高頻度である。診療所単位では 76.7%の施設でおこなわれていることになる。一方、病院と異なりベイスン法が 37 件（8.0%）、診療所単位では 15.1%でおこなわれている実態が明らかとなった。



診療所（463）（MA）

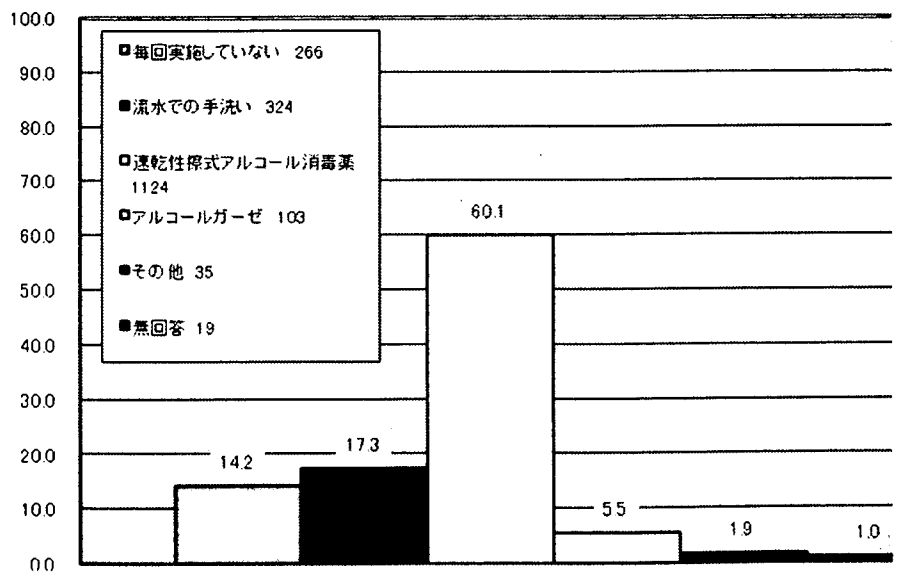


Q20. 回診時の医師の患者間手指衛生法について

病棟回診において、医師における患者間の手指衛生法について複数回答を可として調査した。1,251 病院から 1,871 の回答が寄せられているが、回答別の分布は、患者間手指衛生を毎回実施していないのは 266 件（14.2%）、流水での手指衛生 324 件（17.7%）、速乾性擦式消毒用アルコール製剤による方法は 1,124 件（60.1%）などとなっている。

病院別では、患者間手指衛生を実施していないは 21.3%、流水の使用 25.9%、速乾性擦式消毒用アルコール製剤による方法は 89.8%となる。

回診時の医師の患者間手指衛生法は（1871）（MA）

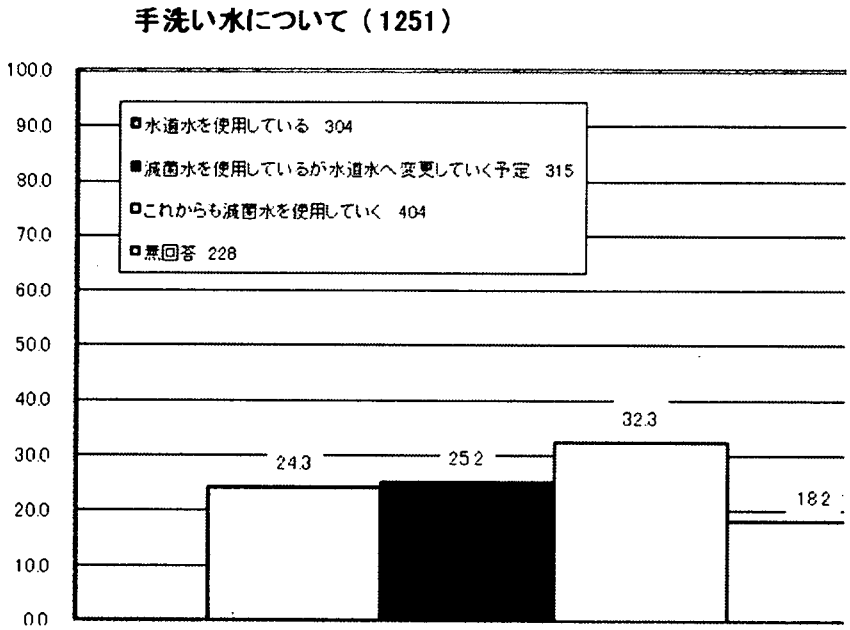


Q21. 手術時手洗い水について

2005年2月1日に医療法施行規則の一部が改定され、手術室おける手洗い水が滅菌水でなくてもよいこととなったが、その後の各病院での対応状況について調査した。

1,251病院において、水道水に変更した病院は304病院（24.3%）、現状では滅菌水を使用しているが、水道水に変更していく方針となっている病院は315病院（25.2%）であり、水道水への変更に対しては619病院（49.5%）が対応していることがうかがえる。しかしながら、従来からの滅菌水を使用していく方針の病院が404病院（32.3%）存在することも事実である。

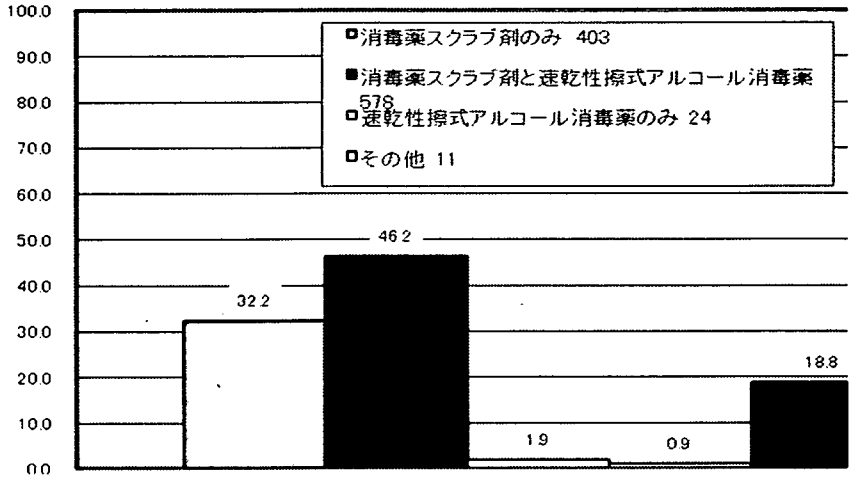
無回答の病院が228病院（18.2%）あるが、手術を実施していない病院と考えられる。



Q22. 手術時手洗いに使用する消毒薬について

抗菌石鹸としての消毒薬スクラブ剤の使用は1,251病院中403病院（32.2%）、消毒薬スクラブ剤と速乾性擦式消毒用アルコール製剤の両者の使用が578病院（46.2%）、速乾性擦式消毒用アルコール製剤のみによる手術時手洗いを実施している病院は24病院（1.9%）にとどまっている。アルコールの使用前に非抗菌性石鹸を使用した前洗浄（素洗い）を加えている施設として調査すればさらに頻度は高くなるものと思われる（Q25を参照）。消毒薬スクラブ剤の使用は981病院（78.4%）である。無回答の病院は手術を実施していない病院と考えられる。

手術時手洗いに使用する手指消毒薬について（1251）



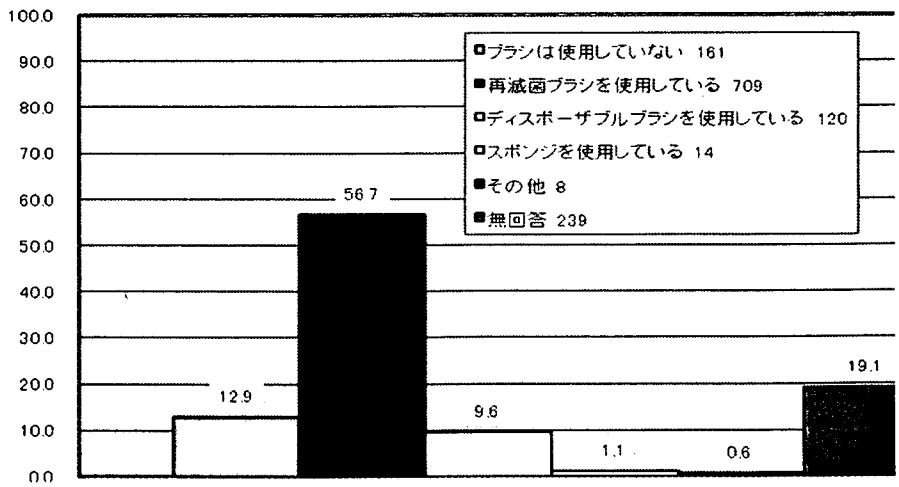
Q23. 手術時手洗いにおけるブラシの使用について

衛生的手洗いにおいても、手術時手洗いにおいても、いかに手荒れを起こさないような手指衛生をおこなうかということが求められており、ブラシを用いたスクラブ法は、次第に揉み洗い法へと変遷している。

今回の調査では、1,251 病院中ブラシを使用していない病院は 161 施設（12.9%）であり、アルコール擦式消毒もしくは揉み洗い法を採用していると思われる。従来からの毛足の硬い再滅菌ブラシを使用している病院は 709 病院（56.7%）である。毛足の柔らかいディスポーザブルブラシの使用は 120 病院（9.6%）である。スポンジの使用はほとんど行われていない状況である。

無回答の病院は手術を実施していない病院と考えられる。

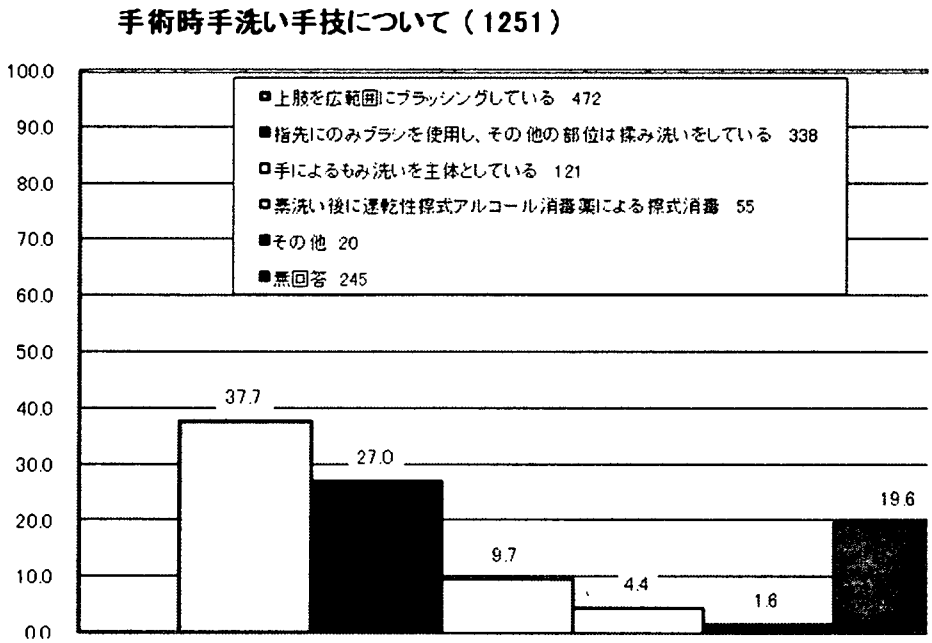
手術時手洗い用のブラシについて（1251）



Q24. 手術時手洗い手技について

従来からのブラシを使用したスクラブ法による手洗いは、1,251 病院中 472 病院（37.7%）であり、続いて指先にのみブラシを適用して、その他の部位は揉み洗いをおこなっている病院は 338 病院(27.0%)、手による揉み洗いのみの施設は 121 病院(9.7%)である。流水と非抗菌性石鹸による素洗い後に速乾性擦式消毒用アルコール製剤のみによる手術時手洗いを実施している施設は 55 病院（4.4%）である。

無回答の病院は手術を実施していない病院と考えられる。(以下同様)



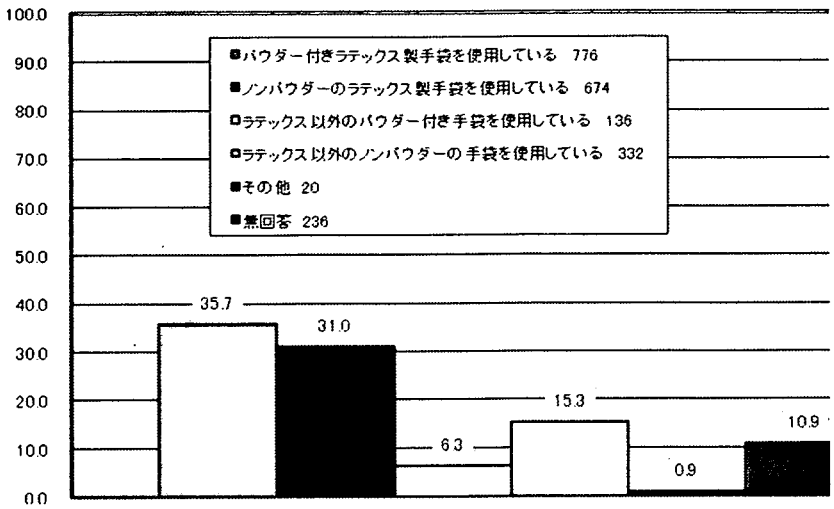
Q25. 手術時に使用する手袋について

手術時に使用する手袋について複数回答を可として調査した。

パウダー付きのラテックス製手袋を使用している施設は、2,174 回答中 776 件(35.7%)、ノンパウダーのラテックス製手袋の使用は 674 件（31.0%)、ラテックス以外のパウダー付き手袋の使用は 136 件（6.3%)、ラテックス以外の素材でノンパウダーのものの使用は 332 件（15.3%）である。

病院別にみるとパウダー付きのラテックス製手袋を使用している病院は、1,251 病院中 776 件（62.0%)、ノンパウダーのラテックス製手袋の使用は 674 件（53.9%)、ラテックス以外のパウダー付き手袋の使用は 136 件（10.9%)、ラテックス以外の素材でノンパウダーのものの使用は 332 件（26.5%）となる。

手術時に使用する手袋について（2174）（MA）



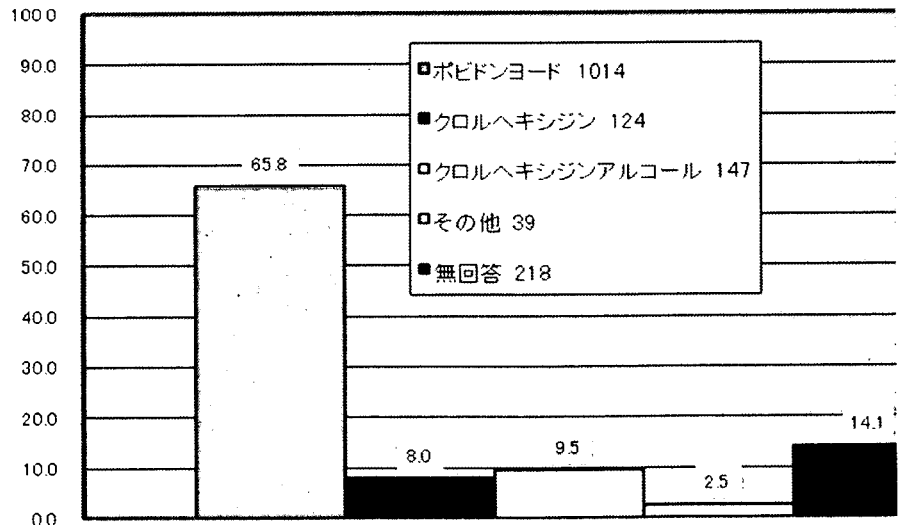
Q26. 術野消毒に使用する消毒薬について

手術時の術野消毒に使用する消毒薬について、複数回答を可として調査した。

消毒薬としてポビドンヨードは1,542回答中1,014件（65.8%）、クロルヘキシジングルコン酸塩製剤は124件（8.0%）、クロルヘキシジンにアルコールが配合された製剤を使用しているのは147件（9.5%）である。

複数回答のため病院単位でみると、ポビドンヨードは1,251病院中1,014件(81.1%)、クロルヘキシジングルコン酸塩製剤は124件（9.9%）、クロルヘキシジンにアルコールが配合された製剤を使用しているのは147件（11.8%）となる。

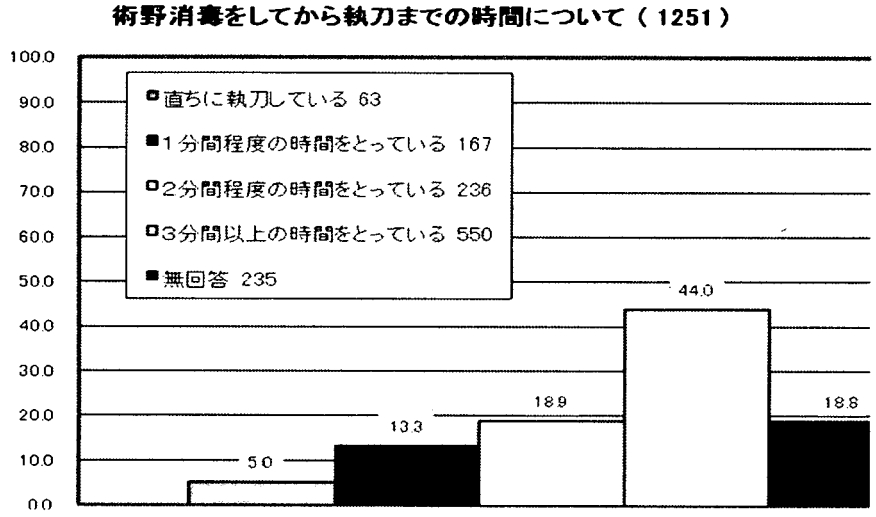
術野の消毒に使用する消毒薬は（1542）（MA）



Q27. 術野消毒をおこなってから執刀までの時間について

消毒薬は塗布後ただちに効果を発揮するものではなく、数分間の時間が必要である。そのため、消毒から執刀までの時間について調査してみた。

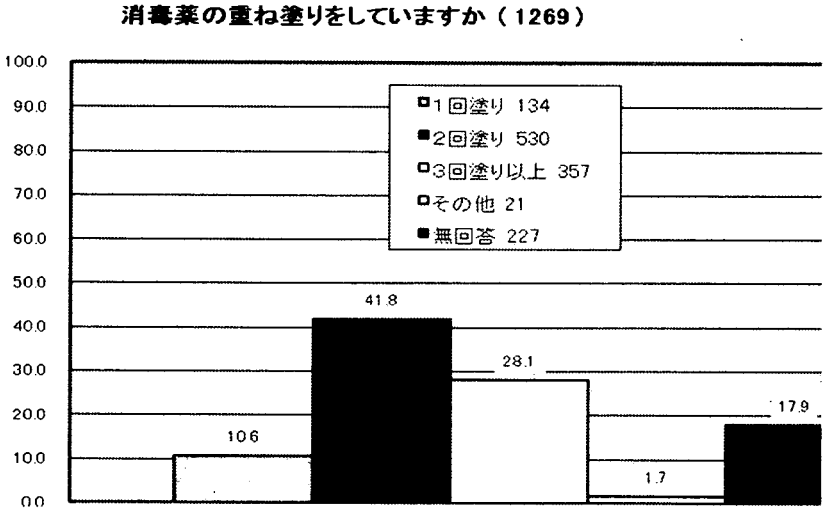
術野の消毒後ただちに執刀している施設は1,251病院中63病院（5.0%）、1分間程度の時間を経ているのは167病院（13.3%）、2分間程度の時間を取っているのは236病院（18.9%）、3分間以上の時間を経てから執刀している施設は550病院（44.0%）である。



Q28. 術野消毒における消毒薬の重ね塗りについて

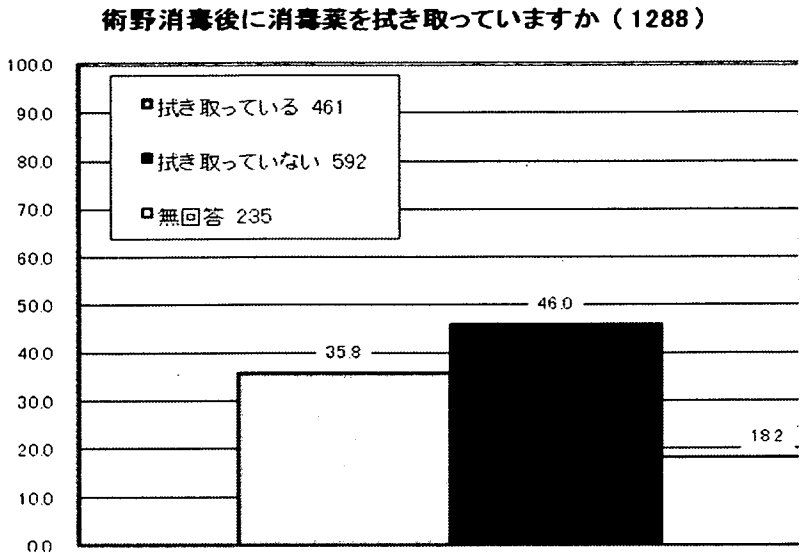
消毒薬は一回塗布のみでなく2〜3回の塗布がその有効性を高めることが想像できる。その重ね塗りの状況について調べてみた。（複数選択した回答が10件あり）

1,269回答中で、1回塗布が134病院（10.6%）、2回塗布が530病院（41.8%）、3回塗布以上が357病院（28.1%）である。



Q29. 術野消毒後に消毒薬を拭き取っているかどうかについて

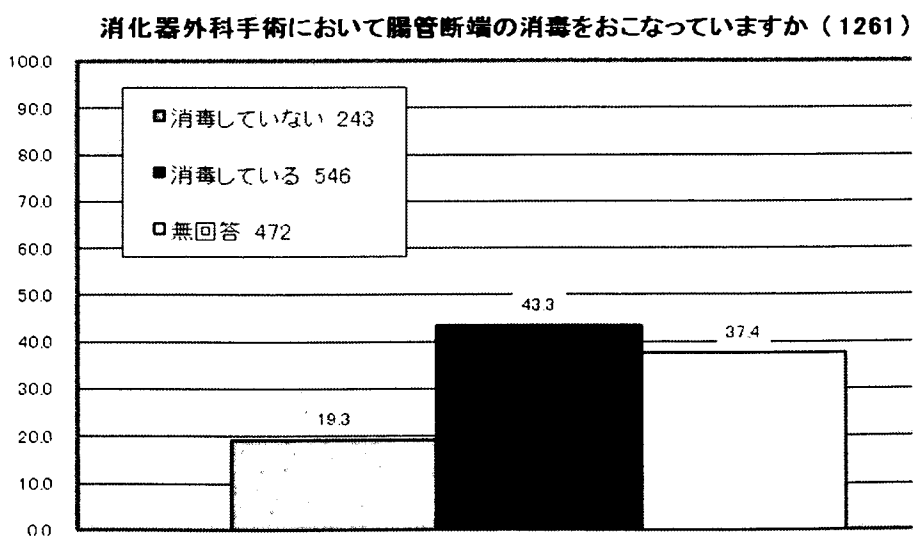
1,288 回答中、消毒後に術野の消毒薬を拭き取っている施設は 461 病院（35.8%）に達している。（複数選択した回答が 37 件あり）



Q30. 消化器外科手術時の腸管断端の消毒について

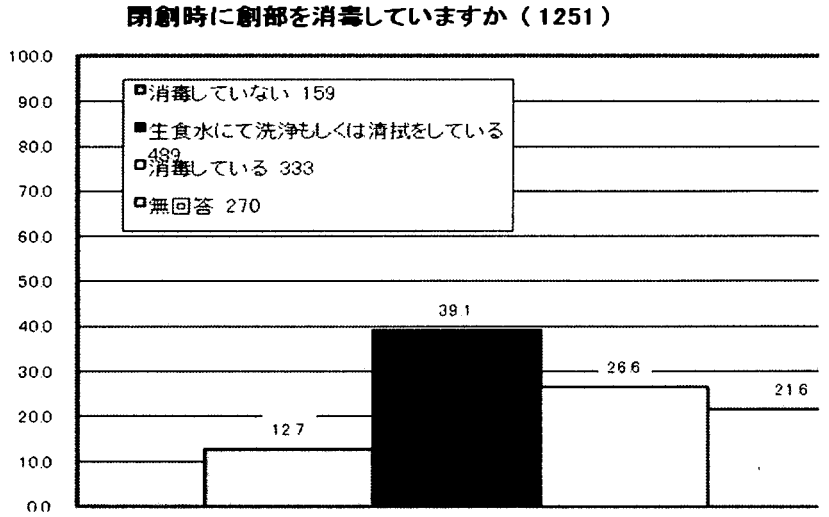
腸管吻合に際して、腸管の断端を消毒するか否かについて調べた。（複数選択した回答が 10 件あり）

1,261 回答中、243 病院（19.3%）では消毒していないが、546 病院（43.3%）では、腸管断端の消毒がおこなわれている。無回答は消化器外科手術を実施していない施設と思われる。



Q31. 切開創の閉創時の創面の消毒の有無について

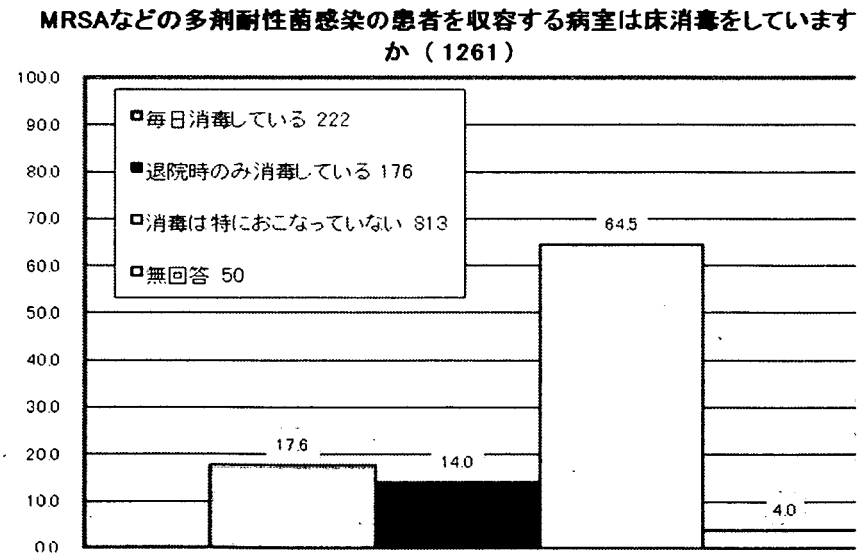
1,251 施設において、閉創時に創部の消毒を実施していない施設は 159 病院(12.7%)、生理食塩水にて洗浄もしくは清拭をおこなっている施設は 489 病院 (39.1%)、消毒薬を使用した消毒をおこなっている施設は 333 病院 (26.6%) となっている。なお、無回答は手術を実施していない施設と思われる。



Q32. 多剤耐性菌感染患者を収容する病室の床消毒について

いわゆるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) などの感染者を収容する隔離病室の環境整備について、床消毒を中心に調査した。(重複回答が 10 件含まれる)

隔離病室の床消毒を毎日実施しているのは 1,261 件の回答の中で 222 病院 (17.6%)、退院時のみ消毒している施設は 176 病院 (14.0%)、床消毒は特におこなっていない施設は 813 病院 (64.5%) である。



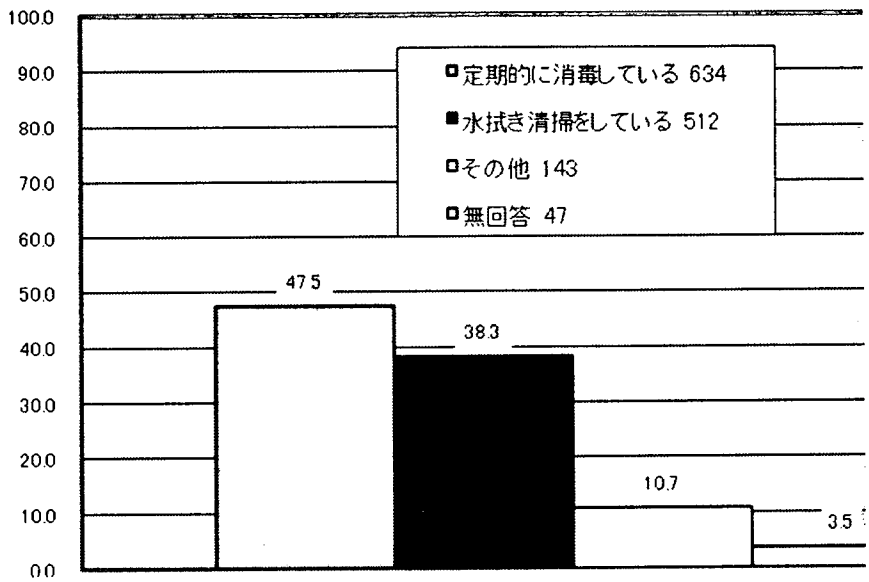
Q33. 手が高頻度に触れる箇所の処置法について

日常的に手が頻繁に触れるドアノブなどの環境に対してどのような対応を示しているかについて調べてみた。(重複回答が85件含まれる)

定期的な消毒をおこなっている施設は1,336回答中634病院(47.5%)、消毒薬を使用せずに水拭きが主体の施設は512病院(38.3%)である。

1,251病院として計算すると、定期的な消毒をおこなっている施設は634病院(50.7%)、消毒薬を使用せずに水拭きが主体の施設は512病院(40.9%)となる。

手が高頻度に接触する箇所はどの様にしていますか(1336)

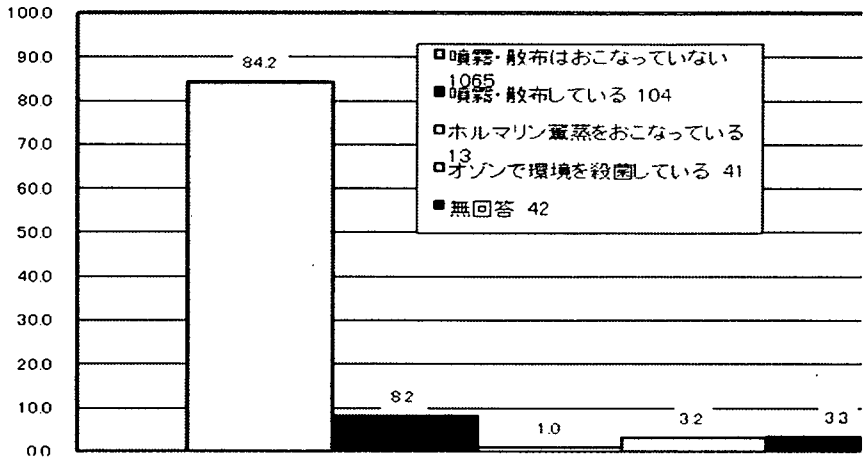


Q34. 環境整備のための消毒薬の噴霧、散布、薫蒸について

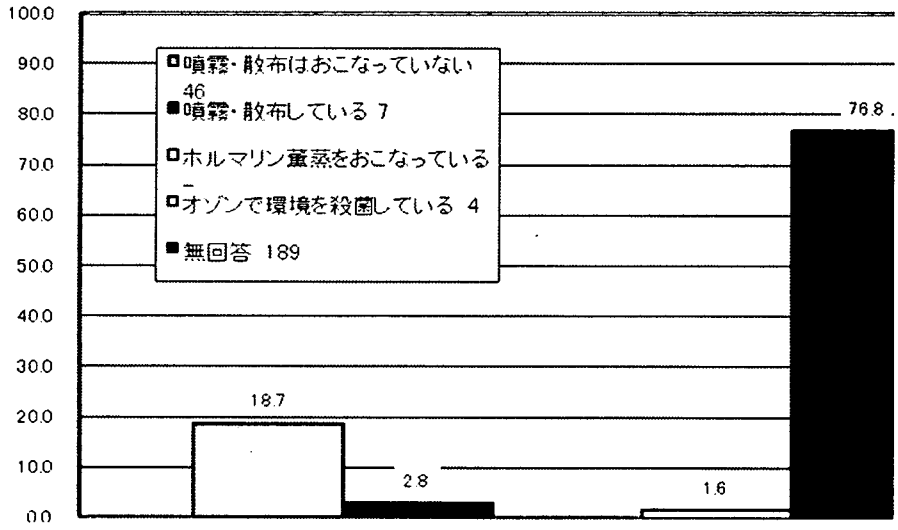
14件の重複回答を含む1,265件の回答において、消毒薬の噴霧や散布をおこなっていない施設は1,065病院(84.2%)、噴霧や散布を実施しているところは104病院(8.2%)、ホルマリンの薫蒸をおこなっているのは13病院(1.0%)、オゾンを使用して環境消毒をおこなっているところは41病院(3.2%)である。

診療所においては、重複回答1件を含む246回答中7施設(2.8%)にて消毒薬の噴霧や散布が実施されている。

環境整備のために消毒薬の噴霧、散布、薫蒸などをおこなっていますか
（1265）



診療所（246）

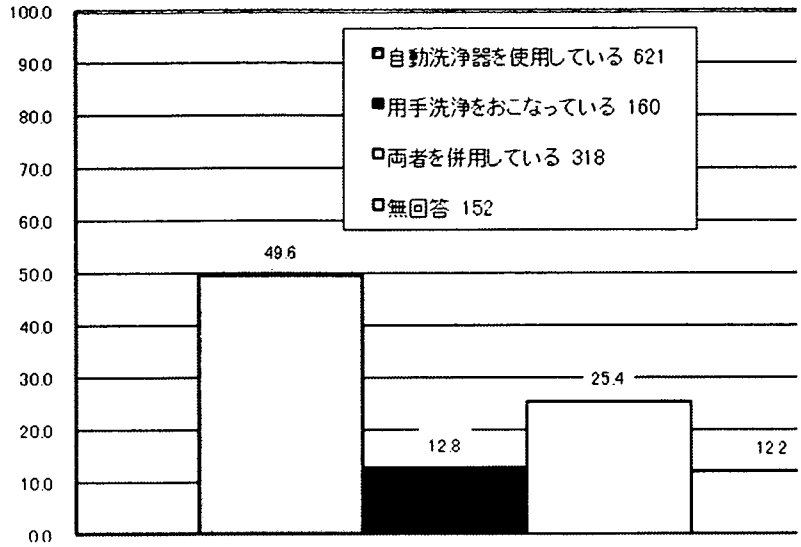


Q35. 消化器内視鏡の患者間消毒について

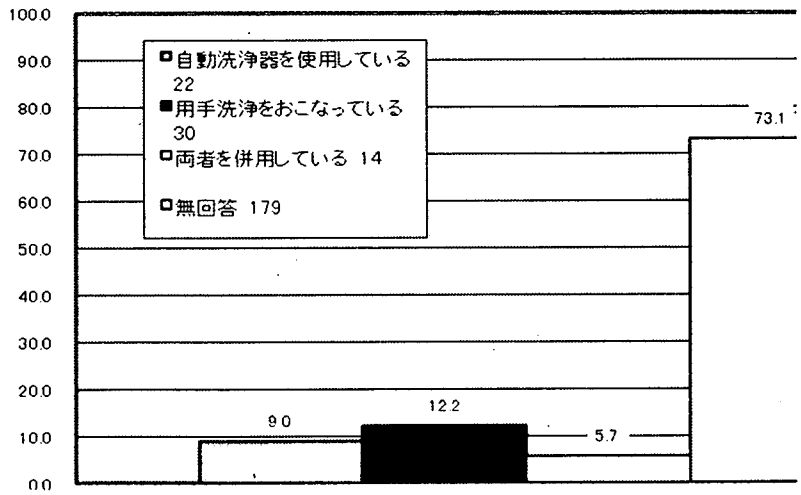
消化器内視鏡の患者間処理において、自動洗浄器を使用している施設は 1,251 病院中 621 病院（49.6%）、用手洗浄がおこなわれているところは 160 病院（12.8%）、用手と自動洗浄器の併用は 318 病院（25.4%）である。

診療所では、内視鏡自動洗浄器を使用している施設は 245 施設中 22 施設（9.0%）であるが、内視鏡検査を実施していないと思われる無回答施設を除いた 66 施設で見た場合には、用手洗浄をおこなっている施設は 30 施設（45.5%）、自動洗浄器を使用（用手洗浄を併用している施設を含む）している施設は 36 施設（54.5%）となる。

消化器内視鏡の患者間処理法はどの様にしていますか（1251）



診療所（245）



Q36. 消化器内視鏡の消毒に使用する薬剤について

消化器内視鏡消毒に使用する消毒薬について複数回答を可として調査した。

グルタラール、フタラール、過酢酸ともに 1,520 件の回答中 343～398 病院（22.6～26.2%）であり、ほぼ同頻度である。一方、電解酸性水は 108 病院（7.1%）にて使用されている。

診療所では、全体的に見れば 253 施設中において、グルタラールの使用は 35 施設（13.8%）であるが、内視鏡検査を実施していないと思われる無回答施設 178 施設を除いた 75 施設の中では、グルタラールは 35 施設（46.7%）、フタラールは 5 施設（6.7%）、過酢酸、クロルヘキシジンを使用している施設はそれぞれ 4 施設（5.3%）である。電解